

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

民族意識の目覚めー南ヴェトナムのムスリムチャム協会ー

著者	中村 理恵
著者別名	NAKAMURA Rie
雑誌名	アジア文化研究所研究年報
号	51
ページ	220(217)-204(233)
発行年	2017-02-28
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00008471/

民族意識の目覚め

——南ヴェトナムのムスリムチャム協会——

中村理恵

はじめに

本稿は、ヴェトナムのムスリムチャム協会 (Hiệp Hội Chăm Hồi Giáo Việt Nam) 略して、チャム協会について、協会の設立とその活動を通してチャム協会が達成したことの意義について考察したものである。チャム協会は、1961年にヴェトナム共和国いわゆる南ヴェトナム政府の認可を得て設立された団体で、メコンデルタ地方から戦火を逃れたり、仕事を求めてサイゴン、現在のホーチミン市に移住してきた少数民族、チャムを支援することを目的として設立された。この協会の設立により、チャムはヴェトナムの少数民族であることが公に認められ、少数民族である協会員は、徴兵制から免除されることになった。設立以降チャム協会は、イスラームを基盤としたチャムの民族意識を主張する様々な活動を行い、1960年代半ばまでには会員数は約15,000人に達していた (Nguyễn Văn Luân 1974:275)。しかし、協会は1975年に南ヴェトナムが消滅したことにより解散となる。

チャム協会は、南ヴェトナムのサイゴン政権によってお墨付きを得ていたため、現在の共産党政権やヴェトナム人学者によって、反革命的でアメリカの傀儡政権による民族分断政策の一つとみなされており (Mạc Du'ò'ng 1978: 37-40, Trần Thị Minh Thu), その資料を入手することは極めて難しい。私は、チャム協会の資料を探そうと、ヴェトナム共和国時代の公文書の閲覧を、2年間に渡り交渉したが認められなかった。資料入手が難しいこともあり、チャム協会に関

する研究は少ない。数少ないチャム協会に関する情報は、グエン・ヴァン・ルアン (Nguyễn Văn Luân) の「南ヴェトナム西部のムスリムチャム (Ngu'ò'i Chăm Hồi giáo miền Tây Nam phần Việt Nam)」という本に見出される。しかし、ルアンのチャム協会についての説明は、土着化したイスラームを正して「正しいイスラーム」に帰依しようというチャムの間に起こった運動と、メコンデルタのムスリムチャムの間で起こったムダ派 (Muda) とトア派 (Tua) の対立という二つの社会現象を混在して説明したために、解かりにくいものになっている。

本稿は、チャム協会の役員であった人に対する聞き取り調査で得られた情報をもとに、チャム協会の設立の過程を明らかにし、この組織の歴史的な意味を考察したものである。チャム協会は、メコンデルタからサイゴン、つまり地方から都会に移住してきたチャムの民族意識の覚醒と捉えることができるのではないだろうか。そして同時に、この協会は、チャム民族の中で、住む地域と宗教、慣習などを異にするチャムが、お互いを認識して繋がり合おうとした最初の試みであったと考えられる。本稿では、ルアンが渾然として説明したチャム協会の設立、「正統派イスラーム」への帰依運動、ムダ派とトア派の対立という3つの社会現象をそれぞれ説明し、それがどのように関係していたかということについての説明も試みた。

ヴェトナムのチャム族

ヴェトナム社会主義共和国政府は、自国民を

現在54の民族に分類している。ヴェトナムの民族学者は言語に依拠して民族分類を行っており、ヴェトナムに住む民族は、モン・クメール語族、マラヨ・ポリネシア語族、シナ・チベット語族の三つの主要言語グループに分けられ、それぞれの民族は、このいずれかの語族に属すものとして分類されている（吉沢 1982; Khong Dien 2002）⁽¹⁾。少数民族とみなされる53の民族は、ヴェトナム総人口の12%を占めており、その多くは山岳地帯に居住しているが、ホア（Hoa）と呼ばれる中華系の人々、クメール、チャムの三つの少数民族は多数民族のキン族（Kinh）と同様に平野部に居住している（Khong Dien 2002）。

チャム族はマラヨ・ポリネシア語族に属す海洋民族で、彼らは2世紀ごろに南海の交易ルートを押さえるために進出してきた中国（漢）の支配を退け、ヒンドゥー文化を受容してヴェトナム中部に興ったチャンパという王国の末裔であると考えられている。チャンパは、東南アジアと中国を結ぶ海洋交易の重要な中継港を有することにより、9世紀から15世紀にかけて栄えた。現在ヴェトナム中部に点在するチャンパの遺跡群は、当時のチャンパの栄華を偲ばせている（重枝 & Tran Ky Phuong 1997; A. Reid 1999; 桃木 1999, 2001）。

ヴェトナムに住むチャムの人口は約132,000人⁽²⁾。地理的、歴史的、宗教的違いから二つのグループに大別される。一つはヴェトナム中南部のニントゥアン省（Ninh Thuận）とビントゥアン省（Bình Thuận）に住むチャムで、この二つの省に住むチャムの人口は約86,000人⁽³⁾。彼らは更に、土着化したヒンドゥー教を信仰するバラモンと土着化したイスラームを信仰するバニと呼ばれるグループに分けられる⁽⁴⁾。バラモンとバニは二つの異なる宗教に属するグループなのだが、この両者の関係を詳しく調べると、それぞれがチャムの二元的な世界観のアヒル（Ahier／陽）、アワル（Awal／陰）を体現化しており、チャムの伝統宗教の補完性を表現して

いると考えられる（中村1999, 2009）。

もう一つのグループはメコンデルタ、主にカンボジアとの国境沿いに位置するアンザン省（An Giang）チャオドック市（Châu Đốc）周辺に住むチャムである。人口は約12,000人⁽⁵⁾、ほとんどすべてがスンニー派のイスラームを信仰している。メコンデルタのチャムはホーチミン市やその周辺のドンナイ省（Đồng Nai）やタイニン省（Tây Ninh）にも住んでいる（Phan Văn Dóp & Nguyễn Thị Nhung 2006: 25）。

一般的に中南部のチャムは、チャンパの伝統を受け継ぐ文化的で歴史的なグループであるのに対し、メコンデルタのチャムは、イスラームの規範を社会構成の基盤とする宗教的なグループであるというようにみなされている。ニントゥアン省とビントゥアン省のチャムはチャンパの故地に住み、チャンパから受け継いだ伝統や慣習を守っているという意識から、チャム族の「血筋」ということにこだわる。チャムであるためにはチャムの両親から生まれなければならない。他民族との婚姻、殊にチャンパを滅ぼしたキン族（ヴェト族）との婚姻は、チャムの「血を汚す」こととして捉えられる。キン族と結婚したチャムは、チャムの伝統をないがしろにする者とみなされ、多くの場合チャムの村から出ていかななければならない。チャム族とキン族との結婚は、チャムの男性とキンの女性によるものが多く、そのような結婚で生まれた子供は、チャムの母系制の原則からキン族である母親の家系に属することになり、結果的にチャムの人口の減少につながる。

これに対してメコンデルタのチャムの間では、異なる民族との婚姻は、民族の境界を脅かすものとはみなされない。彼らにとってチャムであることはムスリムであることであり、しばしば、チャムとムスリムという用語は同義語として使われる。イスラームは、チャムのエスニシティを構築する基盤となっていると同時に、他の民族がチャムに「成る」道筋にもなっている。イスラームにおいて重要なことは神に対す

る絶対服従であり、信者は神に対する服従を行動によって示さなければならない。一日5回のお祈り、戒律に従った服装、宗教的な決まりごとに従って準備された食事、断食、貧しい人々への施し、メッカへの巡礼などである。信仰の実践が人をチャムにするのであり、キン族との間に生まれた子供であれ、彼らがイスラームの教えを実践するムスリムになるならば、チャムとしてコミュニティに受け入れられるのである。

ヴェトナム中南部に住むチャムとメコンデルタのチャムは、政府によって規定された民族分類に従って同一民族であると認める一方で、「同種のチャム」であると思われることを嫌う傾向にある。チャンパの歴史と伝統を受け継いできたと自負する中南部のチャムは、彼らこそが「真のチャム」であり、メコンデルタのチャムを、チャンパの起源を忘れた亜流とみなしている。ヴェトナム国内においても、中南部のチャムがチャム族として博物館、各民族を紹介する本、旅行のガイドブックなどでも紹介されている。

亜流として周縁化されたメコンデルタのチャムは、チャンパ以外に彼らのエスニシティの基盤を求めようとする。彼らの中には、自分たちはアンコールからきたのであって、チャンパは彼らの起源ではない、チャンパから来たのは中南部のチャムであると説明する人たちもいる。チャンパは彼らにとっては関係性の希薄な過去であり、彼らの民族意識の基盤にはなりえず、チャンパ以外のイスラームという宗教に彼らの民族基盤を求めている（中村2001）。

チャム協会の設立

グエン・ヴァン・ルアンは、チャム協会の設立についての説明の中で、マ・タイン・ラム（Mã Thành Lâm）、ムスリム名ホーセン（Hosen）という人物について述べている。マ・タイン・ラムはニントゥアン省出身のバニ教徒で、後にイスラームに帰依した。彼はバニとイスラームの信仰を統一しようと、サイゴンのナンシー地区（Nancy）に住むメコンデルタから来たムスリ

ムチャムと交流するようになり、その結果、ムスリムチャムの組織を結成することになったという（Nguyễn Văn Luận 1974：272）。しかし、ルアンは、マ・タイン・ラムがチャム協会の設立に、実際どのように関与したかについては、明確には言及していない。またチャム協会の結成が、ニントゥアン省のチャムの働きかけによるものという説明には、納得しがたいものがある。チャム協会の設立のために実際に中心になって動いた人物は、メコンデルタ出身のチャム、ドハミデ（Dohamide）だったからである。彼については、ルアンもチャム協会の影の立役者として紹介している（Nguyễn Văn Luận 1974：272, 274, 280）。

チャム協会は、ドハミデという傑出したムスリムチャムの知識人による、チャムのコミュニティをエンパワメントし、ヴェトナム社会における彼らの地位を向上させようというビジョンが具現化されたものだった。メコンデルタには7つのチャムのコミュニティがあるが、ドハミデは、メコン川の支流、バサック河（Bassac）または、ホウザン河（Hầu Giang）の中洲にあるカットンボン（Katambong）の出身である。カットンボンのチャムは経済的に豊かではないが、教育を重んじ多くの知識人を輩出している。ドハミデの父親は、フランスの植民地制度下で教員をしており、息子を1949年にサイゴンにある上級学校に行かせた。成績優秀であったドハミデは、秀才を集めたペトスキー（Pétrus Ky）高等学校（現在のレ・ホング・フォン（Lê Hồng Phong）高等学校）に入学を許されたが、仏植民地支配に抵抗する学生運動に参加したことが原因で、サイゴンから150キロほど離れた、メコンデルタのカントー市（Cần Thơ）の高校に転校させられてしまう。しかし、ドハミデはここでもファン・ボイ・チャウ（Phan Bội Châu）という学生による抗仏地下組織に参加していた。後になって彼は、この地下組織が共産党グループ、ヴェト・ミンによって画策されたものであったことを知ったという。

ドハミデは高校を卒業するとサイゴンに戻り、ナンシー地区に住む姉の家族の所で生活する。ドハミデは姉の家族を経済的に支えるために、軍関係の事務所で退役兵の年金や福利厚生に関する書類を作成する仕事をし、更に収入を増やすために、チャムの人々やコミュニティに関する記事を新聞や雑誌に投稿するようになる。ある時ドハミデは新聞が企画したエッセイのコンクールに参加、見事一等賞を獲得した。このことがきっかけで、ブイサン新聞 (Bu'oi sáng) にチャオドックのチャムに関する記事を、また週刊新聞のテーゾイ (Thế giới) に社会問題に関する記事を書くようになる。

その後、ドハミデは南ヴェトナムの知事庁 (Thủ hiến Nam Việt) で働くようになる。ここで働くことは非常に名誉なことで、このことによって彼の社会的な地位は高まり、人々の信頼を得るようになる。彼の勤務先の向かいには国立図書館があった。ドハミデはそこに足しげく通い、チャムやチャンパに関する資料を読むようになり、当時、図書館の館長だったチャン・クアン・タオ (Trần Quang Tấu) と親しくなった。彼はドハミデのチャム・チャンパ研究を支援するようになる。この頃ドハミデは図書館で見つけたフランス人の文化人類学者、レビ・ストロース (Levi-Strauss) の「悲しき熱帯 (Tristes tropiques)」に感銘を受け、彼を師と仰ぐようになる。

1956年、ドハミデは弟のドロヒム (Dorohiem) と共に官僚学院に入学し、山岳地帯に関する学部で2年半にわたり勉強する。学院長は成績優秀な少数民族出身の二人に目をかけていた。彼の兄弟で、考古学院 (現在のホーチミン市の国立歴史博物館) の院長で、チャムの研究で知られていたギエム・タム (Nguyễn Thâm)⁽⁶⁾ は、ドハミデがブイサン新聞に連載した記事を高く評価した。其の頃、南ヴェトナムでメコンデルタのチャムについて書かれた本は1冊しかなく、参考文献等の引用がない、学術的に信頼性の少ないものであった。

ギエム・タムはドハミデとドロヒムに、正確な情報に基づいた、学術的に信頼のおけるチャムの歴史の本を出版してはどうかと提案する。彼の勧めと支援、図書館長のチャン・クアン・タオの協力などにより、ドハミデはドロヒムとの共著で、1965年に「チャム民族の略史 (Dân tộc Chàm Lu'ợc sử')」という本を出版する。この本は主にフランス人の研究による資料を基にして書かれているが、執筆にあたり、二人はニントゥアン省のチャムの間でも調査を行っている。

「チャム民族の略史」は、チャムによって書かれた最初のチャンパの歴史の研究書で、ドハミデはこの本を出版することによって、チャンパの歴史を公に広めるとともに、メコンデルタのムスリムチャムに、彼らの起源がチャンパにあるのだということを伝えようとしたのであった。

官僚学院卒業後、ドハミデは内務省で3年半、財務省で3年半働いた。財務省で働いている時に反政府分離独立運動、フルロ (FULRO : Front Unifite de Lutte des Races Opprimées) がチャムを含む中央高地山岳少数民族によって組織され、サイゴン政権の脅威となった。少数民族出身の官僚は次々と地方に左遷されたが、ドハミデはサイゴンにとどまり平和・平定のための副首相特別府 (Phủ Phó Thủ Tướng Đặc Trách Bình) に送られる。ここで彼は少数民族の調査研究部の長として働くが、働き始めて数ヶ月後にグエン・カオ・キ (Nguyễn Cao Kỳ) によるクーデターが勃発したため、別の部署に移動させられた。しかし、新しい部署で働き始めて数ヶ月もしない内に、今度はアメリカに留学することになった。彼はカンザス大学で修士号を修得し、博士号を目指していたのだが、1967年にサイゴンに呼び戻され、計画支援部の部長に就任する。この部署は、アメリカからやってくるアドバイザーを様々な側面から支援していたが、彼以外に職員はおらず、彼がアメリカ人アドバイザーの世話係になったようなものであった。おそら

く当時のサイゴン政権下では、英語を流暢に操れる官僚が不足しており、増加するアメリカ人アドバイザーに対応するために、アメリカに留学していたドハミデに白羽の矢が当てられたのであろう。彼はミシガン大学やシカゴ大学から来た研究者を支援し、彼らの調査ために便宜を図った。ドハミデのように高学歴で、政府の高官としてキャリアを積んだというのは、ムスリムチャムの間では非常に例外的な存在である。

一般的に、メコンデルタのムスリムチャムは稲作の他に、行商や小さな商いで生計を立てていた。彼らは、布やその他の日用必需品を様々な地域で売り歩いた。行商に従事していたチャムは、メコンデルタから中央高地などの別の地域へ移動するための中継地点として、またチョロン (Chợ Lớn) の市場から商品を仕入れるために、サイゴンに小さな休憩所をもつようになる。ますます激しくなる戦禍を逃れ、職を求めてサイゴンにやって来るチャムが増えるにつれて、簡易の休憩所は定住するための住居となり、徐々にチャムのコミュニティが形成されていった。こうして出来たサイゴンのチャムコミュニティで最も古くからあるものが、ナンシー地区にあるチャムのコミュニティである (Nguyễn Hồng Du'ong 2007 : 162)。

ドハミデは高校卒業以来、このナンシー地区のチャムコミュニティに住んでいたが、1951年ごろ、近所に住むチャムに頼まれて、チャムの青少年を対象にしたフランス語とヴェトナム語のクラスを始める。サイゴンで就職するためにはこれらの言語が話せることが非常に重要なことであった (Dohamide 2004 : 70)。

ドハミデのフランス語・ヴェトナム語クラスは、当初8人から出発した。生徒数は徐々に増えて15人ほどになり、近所に住むヴェトナム人 (キン族) もこのクラスに参加するようになった。この言語クラスにおいて、生徒たちはチャンパの歴史にも興味を示すようになり、またチャムのコミュニティの間で生じている様々な問題についても話し合うようになった

(Dohamide 2004 : 70)。ドハミデには、この言語教室を通して、チャムの青年たちに、社会活動を組織する能力を植え付けたいという思惑があった。彼は後に、「自分はそれまでの根拠のない、いわゆるコンセンサスと呼ばれるものによってではなく、多数決の原則による、より民主的な方法でコミュニティを運営していくという新しい考え方を生徒たちの間に植え付けることが出来た」⁽⁷⁾、と述べている。ドハミデのクラスの生徒の中には、彼によって雇用されて部下として働いた人たちもいる。ドハミデが開いたこの言語教室は、向上心の高いチャムの青年たちの間に社会活動の精神の種をまき、それがチャム協会の設立、運営と繋がっていくのであった。

1950年代、メコンデルタのチャムは、ヴェトナムの普通教育ではなく、宗教を中心とした教育を受けていたため、アルファベット化されたヴェトナム語よりも、ジャウィ文字に親しんでいた (Dohamide 2004 : 70)。そのため、メコンデルタからサイゴンにやって来たチャムは、就職や住民登録などに必要な書類の記載方法が解らない人が多かった。彼らは役所に提出するための書類制作を手助けしてくれる人や組織を非常に必要としていた。早くにサイゴンに移り住むようになったチャムの多くが、ダン・マル (Danh Mal) または、ハジ・マモット (Haji Mamod)、一般的には、オン・バイ・モット (Ông Bái Mốt) という呼称で知られていたナンシー地区に住むチャムに頼っていた。ダン・マルはサイゴンで有名な占い師で、政府の高官の妻たちの間で非常に人気があり、彼女たちは競って彼のもとに通っては、夫に愛人や妾ができないようにとお守りを買っていた。彼女たちを通してダン・マルは政府の官僚や高官たちと繋がりを持っていた。彼は、ナンシー地区に最初に建てられた小さなモスクの建設費用を出資し、コーチシナ・マレー協会 (Association of Malays of Cochinchina) というものを設立した (Dohamide 2004 : 67-68)。マレー人ではない

ダン・マルが、マレーという名前を協会の名前に入れたのは、おそらく当時のサイゴンにおいて、チャムよりもマレーという民族名の方が知名度が高かったからであろう。仏植民地時代、マレー人は、警備員や棧橋などで働く労働者として雇われていた。サイゴンの船着場にやってくる船で働く人たちの多くは外国人で、彼らはチャムなどという民族を知らなかった (Dohamide 2004 : 68)。それで、サイゴンの棧橋やフランス人が運営する工場などで働き口を探すとき、チャムは自分たちをマレー人としていたのである (Dohamide 2004 : 63)。

ナンシー地区に建設されたモスクは、サイゴンや中華系の人たちの住むチョロン (Chợ Lớn) で、賭博や売春を仕切っていた武装集団ビンズエン (Bình Xuyên) の抗争によって発生した火災により1954年に焼失してしまった (Dohamide 2004 : 69 ; Nguyễn Hồng Du'ông 2007 : 162)。モスクを再建するためにナンシー地区のチャムたちは、ナンシー地区以外のチャムからも資金の援助を呼びかけた。建設費が集まると、宗教施設を建設するための政府の許可が必要となった。政府の許可を申請するためには、申請者としての何らかの組織が必要となる。ダン・マルが中心になって設立したコーチシナ・マレー協会が当然、チャムを代表する組織になるはずだったが、ダン・マルは協会名にマレーを使うことにこだわり、チャムという民族名を入れることを承諾しなかった。ゴー・ディン・ジエム (Ngô Đình Diệm) の政権下では、マレーは外国人とみなされていた⁽⁸⁾。ジエム政権の少数民族政策による恩恵にあずかるためには、協会名にはマレーではなくヴェトナムの少数民族であるチャムという民族名が使われていなければならない。結果的に、コーチシナ・マレー協会とは別の協会が設立されることになった。それがチャム協会である⁽⁹⁾。

チャム協会が政府によって認可されるためには、国会での承認が必要であった。そのため、ドハミデはファンティエット (Phan Thiết) 出

身の国会議員でバラモン教徒のチャムと、トゥ・ cong ・ スアン (Tù' Công Xuân) というチャムの国会議員に協力を求める。スアンはニントゥアン省のヴァンラム (Vãn Lâm) というバニ教徒の村の出身で、教員をしていたが後に政治に参加した。ドロヒムは、チャム協会は南部のチャムと中部のチャムが初めて「握手して(協力して)」できた団体だったと述べている。

チャム協会は、メコンデルタから大都會のサイゴンに移住してきたチャムの互助団体として発足した。協会の運営費は会員の会費によって賄われることになっていた。会員は入会金として30ピアストル、そして月々10ピアストルを協会に収めていた (Nguyễn Văn Luận 1974 : 273)。チャム協会は1960年半ばには15,000人の会員を持っていた。単純計算で、毎月150,000ピアストルの収入があったことになる⁽¹⁰⁾。しかし、実際には会費が徴収されることはなく、協会の運営費はイスラム諸国からの資金援助によるものだったと話す元会員もいる。マレーシア政府からは、本などの物品やサービスによる支援を得ていたようである。ただし、チャム協会がアメリカの画策によって設立されたものと批判している一部のヴェトナム人の学者が主張するように、チャム協会がアメリカ政府やサイゴン政府から資金援助を得ていたという事実はない。このことは、戦時中にサイゴンのムスリムチャムの間で、密かに共産党の工作員として活動していた共産党の幹部も認めている。

チャム協会の設立メンバーの大半が、ドハミデと同様に、他のチャムの地域と比べると教育レベルの高いカットンボン出身者であった。しかし、不思議なことにドハミデの名前は、設立メンバーのリストの中にはない。彼は、協会の重要な決定事項に常に関与していたのだが、協会の幹部として表立って活動しなかった。それは、ドハミデが新しい民主的な組織運営を目指していたからだった。伝統的なチャムの社会は、宗教的知識、道徳性などによって階級付けがされ、常に宗教指導者によって導かれるように

なっている。ドハミデはもっと水平的な階級差のない組織をつくり、そうすることによって、すべての会員が自由に自分の意見を発言できるようにしたいと思っていたのだ。政府の高官として活躍していたドハミデは、表立って動くことによって、水平的な組織構造に悪影響を及ぼすことを懸念していたのだ。チャム協会は後に役員を選挙によって選出するようになる。

チャム協会の主な活動

チャム協会は政府による認可団体だったため、チャムのコミュニティと政府のパイプ役を務めるようになり、政府はチャムコミュニティへの対応をチャム協会に依存していた。

チャム協会の活動は、チャム民族であることを証明するチャム民族証明書の発行、サイゴンにやって来たチャムの生活と宗教活動に対する支援、イスラームに対する公の理解を深めること、海外のムスリムとの交流、の主に四つに分けられる。

当時の南ヴェトナムのチャムが直面していた最大の問題は、徴兵制度であった。ヴェトナム共和国では18歳以上の健康な青年は兵役につかねばならなかった⁽¹¹⁾。ムスリムであるチャムは軍に入ることをととても恐れていた。それは入隊することによってイスラームの教えの実践、特にハラル (Haral) という宗教規則に従って調理された食事以外のもの、ことに豚肉の混じった食事を食べなければならないこと、そして戦場で戦死した人をイスラームの規則どおりに直ちに埋葬できなくなることからであった。ゴ・ディン・ジエムは仏植民地時代の制度を踏襲して中央高地を特別な地域、南インドシナ山岳民族国 (*Pays Montagnard du Sud-Indochinois*) (Salemink 2003: 146) とし、中央高地に住む少数民族の兵役を免除していた⁽¹²⁾。チャム協会は中央高地の少数民族と同様に、チャムに対する兵役免除⁽¹³⁾を政府に認めさせることに成功し、協会はムスリムチャムに民族証明書を発

行するようになる。証明書発行の業務は後に、ドハミデの弟のドロヒムが所属する少数民族開発省に引き継がれた。

ところで、チャム協会認可のために協力した国会議員のトゥ・ cong グ・スアンは、チャム協会には参加せず、ヴェトナムイスラーム総会 (Tông hội Hồi giáo Việt Nam) という新たな組織を結成した。この組織もまた内務省によって認可された政府公認の団体で、加入した人の多くがパークム (Ba Cum) と呼ばれるイスラームに改宗したキン族だった⁽¹⁴⁾。しかし、ヴェトナムイスラーム総会の会員たちは、懲兵免除のためにチャム協会に参加するようになり、この組織は機能を果たさなくなってしまった。

戦時下の南ヴェトナムにおいて、集会を開催するには様々な困難があり、多数のムスリムが一つところに集まって行う宗教活動には、政府の許可が必要であった。チャム協会は集会許可申請、行事後の報告などの業務を行い、ムスリムチャムが支障なくモスクで祈りを捧げたり、宗教行事に参加できるようにした。当時はしばしば警察によって市民の住民登録状況の検査が行われ、住民登録をしていない、またはしたことを証明することが出来ないチャムが逮捕されるようになり、チャム協会はこの問題に対処した。協会は身元引受人となり、保釈されたチャムが住民登録証を交付されるよう、手続きを行ったのである。

チャム協会はコーランを教える教員たちに給料を支給したり⁽¹⁵⁾、イスラームに関する講演会を開催し、本などを配布して、ムスリムチャムの間でイスラームの理解を深める啓発活動を行っていた。チャムの間で、正しいイスラームの教えが浸透し、ヴェトナム社会において、イスラームが正しく理解されるようにと、ドハミデは1964年から1965年にかけてバックコア (Bách Khoa) という有名な雑誌に、イスラームに関する一連の文章を寄稿した。ヴェトナム人の多くはグル (Guru) と呼ばれる占い師や呪術師を通してイスラームに触れており、この宗

教がどこか禍々しいものであると見る傾向にあった。行商活動などで家を長いこと留守にしていたチャムの男性たちの大半が、第二夫人を娶っており⁽¹⁶⁾、第二夫人の多くがイスラームを知らないヴェトナム人女性で、中にはカトリック教の信者もいた。こういう第二夫人をチャムの村に連れて戻ると大抵の場合騒動が持ち上がり、そういう面からもヴェトナム社会はイスラームに対して良い印象を持っていなかった。ドハミデはイスラームに対する正しい知識を広めることによって、このようなイスラームに対する否定的なイメージを払拭しようと努めたのである⁽¹⁷⁾。

1950年代、ヴェトナム中南部のニントゥアン省のチャムのバニ教徒の間で、「正しいイスラーム」を学ぼうという小さな動きが出始めていた。バニ教徒はアッラーを信奉すると同時に祖先に対する数々の儀礼も行い、母系制により女性が一家を代表してモスクでの金曜日の礼拝に参加し、断食月には僧侶がモスクに30日間籠るというように、一般的なイスラームには見られない独特な宗教的伝統を実践していた。彼らの間でのイスラームを学ぼうという動きは、「正しいイスラーム」を実践したいという宗教的な探究心に端を発した動きであった（吉本2010：240-247）。

グエン・ヴァン・ルアンは、ニントゥアン省のバニ教徒の間でイスラームの布教活動をしたのはチャム協会であると示唆しているが、協会の活動の中には布教活動は含まれていない。チャム協会は、イスラームの教えを学びたいとやって来たニントゥアン省のチャムを支援し、イスラームに帰依した中南部のチャムの間に組織を広げたのである。

バニ教徒の間でイスラームを広めた中心人物は、前述のマ・タイン・ラム（ムスリム名ホーセン）というフックニョンというチャムの村出身のバニ教徒であった。1994年にフィールド調査をしていたときに収集した情報と、グエン・ヴァン・ルンやグエン・ホング・ズーング

（Nguyễn Hồng Du'ong）の調査から得られた情報を総合すると、マ・タイン・ラムは勉学のためにメコンデルタのカントー市にいたらしい。卒業後、彼はサイゴンで農業関係の事務所に就職する。カントー市で勉強している時か、卒業後サイゴンで働くようになってからかは判然としないが、彼はムスリムチャムが大勢住む、チャオドック市を訪問している。そして「正しいイスラーム」がメコンデルタのムスリムチャムの間で実践されていることに触発され、故郷のバニ教徒が実践する「間違っただけ」イスラームを正さなければならないという思いに駆られる（Nguyễn Văn Luận 1974：272, 274）。サイゴンで彼は複数のムスリムと知り合いになり、インド人のムスリム、マハマッド・アリ（Mahamad Ally）から教義を習うようになる（Nguyễn Hồng Du'ong 2007：148）。

バニ教徒の間でイスラームを広めようとした彼は、国会議員のトゥ・コング・スアンに支援を求める。スアンはマイディー（Maideen）という名前のインド人のビジネスマンと、インド人が建立した、ジャミア・アル・ムスルマン（Jamia al Musulman）、一般的にはマスジット・カティナ（Cantina）現在では、マスジット・ドン・ズー（Đông Du）とも呼ばれるモスクのイマーム、アブドゥル・ラティフ・モラウイ（Abdul Latif Moulawi）と知り合いになる。当時、トゥ・コング・スアンはサイゴンのフーニャン（Phú Nhuận）地区に住んでいた。ここにはたくさんムスリムチャムがメコンデルタから移り住んできており、彼はその内の一人の女性と結婚し、ムスリムコミュニティの最高権威者であるムフティ・ウマル・アリ（Mufty Umar Aly）と知り合いになる（Nguyễn Văn Luận 1974：272, 274）。

トゥ・コング・スアンと、アブドゥル・ラティフ・モラウイ、そして、ムフティ・ウマル・アリの三人は布教のために中南部のチャムのコミュニティを訪問した。彼らは当初、ビントゥアン省のファンリ（Phan Ri）に住むバニ教徒

のチャムの間で布教活動を試みたがうまく行かず、ニントゥアン省に布教の場を移した⁽¹⁸⁾。マ・タイン・ラム自身もまたバニ教徒の間でイスラームを普及させるために活動を続けた (Nguyễn Văn Luận 1974 : 274)。1960年代までには、ヴァンラム、ニョーラム (Nho Lâm)、アンニョン、フックニョン (Phú'ò'c Nho'n) の各村にイスラームのモスクが建設され、チャム協会の支部がこれらのモスクに併設された。ルアンによると、1964年には約2000人のチャム協会員がニントゥアン省にいたという (Nguyễn Văn Luận 1974 : 275)。

イスラームに改宗した人々の要請により、チャム協会はヴァンラム、アンニョンそしてフックニョンのムスリムチャムがサイゴンやメコンデルタでイスラームの教義を学ぶための様々な支援を行った。これらのチャムは故郷にもどり、自分の村でイスラームをバニ教徒の間で広めることになるのである (Nguyễn Hồng Du'ò'ng 2007 : 166)。

ドハミデは、海外のムスリムと交流し、チャムの宗教活動をより良いものにしたという希望を持っていた。チャム協会はヴェトナム政府から認可された団体であったため、南ヴェトナムのムスリムを対外的に代表する団体となった。チャム協会はメッカに巡礼をする人々のための書類手続きを代行するようになり、チャムはムスリムの国際的な催しに招待されるようになった。その一例が、マレーシアで開催された国際コーラン競技会や、国際イスラーム会議への参加である。ドハミデは1964年にマレーシアのクアラルンプールで開催された東南アジア・極東アジアイスラーム国際会議 (International Islamic Conference of Southeast Asia and Far East) と、1974年にサウジアラビアで開催されたイスラーム国際会議に参加している⁽¹⁹⁾。1964年のクアラルンプールでの会議では、マレーシアの初代首相、タンク・アブドラフマン (Tunku Abdul Rahman) と親しく交換する機会に恵まれ、同年、タンク・アブドラフマンはチャ

ム協会の招きでサイゴンのチャムコミュニティを訪問している。また、ドハミデはクアラルンプールで中華系ムスリム協会を訪問し、ムスリムではあるが中華系であるために、ムスリムの中のマイノリティである中華系ムスリムと、少数民族でムスリムであるチャムのコミュニティとの間に類似点を見出し、とても有益な話し合いを持つことが出来たと回想している。

チャム協会への反発

グエン・ヴァン・ルアンは彼の著書のチャム協会に関する章で、ムダ派 (Muda) とトア派 (Tua) というムスリムの二つのグループについて述べている (Nguyễn Văn Luận 1974 : 281, 289-296)。ムダ派というのは改革派で、マレーシアからヴェトナムに1950年代ごろ入ってきた⁽²⁰⁾。チャム協会が活動を開始した1960年代になると、改革派のムダ派と伝統的な戒律を重んじるトア派の間で様々な軋轢が生じた。しかし、ムスリムチャムコミュニティにおけるムダ派とトア派についての詳細な調査は、これまでのところなく⁽²¹⁾、ルアンによるこの二つの派と、チャム協会との関係の記述は曖昧で、一体どういう目的で、チャム協会の章でムダ派とトア派について説明しているのか判然としない。私は、ムダ派という改革派の運動は、メコンデルタのムスリムチャムの伝統的な勢力による、都市圏をベースにした世俗的な組織であるチャム協会への反発と解釈することが出来ると思う。

ムダというのは、マレー語で若い・新しいという意味で、ムダ派は1900年代初頭に英領マラヤで興ったマレーの改革派グループである。彼らは、伝統的なイスラームの戒律を踏襲するトア派の保守的な考え方や、マレー社会の封建的な構造に反対し、マレー貴族や特権階級の伝統的な宗教権威に対抗して、マレー社会の根本的な改革をめざした (Bedlington 1978 : 55 ; Nagata 1986 : 37)。彼らは王であるスルタン (sultan) も、宗教法・シャリア (syariah) に従い、宗教上の判断は宗教学者集団・ウラマー (ulama)

に一任すべきだと主張した (Kamarulnizam Abdullah 2003 : 41-42)。ムダ派の教えは、政府主導の宗教規範、銀行貯蓄の問題や女性の教育など、社会のありとあらゆる局面で旧勢力のトア派と対立した。ムダ派とトア派の対立は、ムスリムマレー人のコミュニティの分断を生み、この両者の争いのないマレーの村は存在しないとまで言われた (Roff 1994 : 78, 87)。

チャムの間にムダ派の教えを紹介したのは、マレーシアで勉強していたチャムの人たちであった。チャムの知識人たちによると、最初にムダ派の教えに従った人は、ムバラク (Mubarak) というコミュニティのリーダー、ハケム (Hakim) のイドレス (Idress) で、彼はマレーシアに留学していた。グエン・ヴァン・ルアンはハジ・アヨップ (Haji Ayob) がムダ派の教義をチャムに紹介したとしている⁽²²⁾。彼は、マレーシアのケランタン州に留学しており、現地でマレー人女性と結婚し、1958年にヴェトナムに一時帰国した。彼は父方のおじでチャオフォング (Châu Phong) というコミュニティのハケムであったアブ・サマ (Abu Sama) の家に滞在していた。ある日、ハケム・アブ・サマは集会を開き、そこで、ハジ・アヨップに彼が学んできた宗教知識を披露してもらった。この集会でハジ・アヨップはムダ派の教義について説明し、これこそがイスラームを実践する正しいやり方なのだと言った。しかしながら、彼の説く新しい実践の方法には、メコンデルタのムスリムチャムがこれまで伝統的に実践してきたものとは相容れない要素があり、集会は激しい感情的な口論に終わってしまった。

チャムの人たちがまとめてくれたトア派とムダ派の実践の違いは12項目にわたる。例えば、トア派では預言者は25人いるが、ムダ派では、23人しかいない。断食月、ラマダンの最中に行うタラウエー (tarawat) という特別なお祈りで、トア派はラカッタ (rakat) と呼ばれる祈りの一連の動作を20回することになっているが、ムダ派は8回しかしない (Nguyễn Văn Luận 1974 :

294 ; Nguyễn Hồng Du'ông 2007 : 178)。また、ムダ派はメコンデルタのムスリムチャムが守ってきた伝統的な習慣、例えば、死者への供養の祈り、聖者信仰、占いなどの呪術や、精霊、お守りや聖なるものを信じることを禁止する (Taylor 2007 : 126-127)。

ムダ派の教義はハケム・イドレス、彼の教え子のチャオフォング出身で後にハケムになるハジ・ホーセン (Haji Hosen)、同じチャオフォング出身のハジ・アヨップの親族や近隣に住む人々の間に広まっていった。1975年までには、37家族がムダ派の教義を実践するようになり、其の人数は徐々に増えていった (Nguyễn Văn Luận 1974 : 290 foot note 1)。グエン・ホング・ズーンが2007年に出版した本によると、ムダ派はムスリムチャムの人口の20-25%を占めているという (Nguyễn Hồng Du'ông 2007 : 179)。

ムダ派とトア派の間の対立はきわめて激しく、非常に感情的なものであった。一たびムダ派として知られるようになると、その人は完全な村八分状態に陥った。親族間であってもムダ派とトア派の間ではまったくの行き来がなく、1975年以前、ムダ派とトア派の間の婚姻関係はなかった。チャオフォングのハケム・アブ・サマはトア派に属していたのだが、彼がハジ・アヨップと親戚であるためムダ派とみなされた。チャオフォングのチャム達は、ムダ派の人が宗教上のリーダー、ハケムであることを良しとせず、地方の役人を呼んで集会を開き、別の人をハケムとして選出してしまった。トア派の人たちはムダ派と一緒にモスクで礼拝することを拒み、ムダ派は別のモスクを建設しなければならなくなった。チャオフォングのハケムの地位を追われたアブ・サマは、新設のムダ派のモスクのハケムとなった。グエン・ヴァン・ルアンによるとムダ派とトア派の対立を解消するために1964年から1966年の間に集会が開かれ、和解とムスリムの団結を記念して石碑が建てられたという (Nguyễn Văn Luận 1974 : 293-294)。

私は、ムダ派とトア派の対立には別の要素が

絡んでおり、それがこの対立を複雑にしている
と考える。それは、チャム民族内におけるジャ
ヴァクルの存在である。ムダ派はジャヴァクル
の人たちを中心に広がった。ジャヴァクルは、
交易のためにやって来たムスリムのマレー人男
性とクメール女性の間生まれた人々の末裔で
ある考えられており、クメール語を母語とする。
(Phan Văn Dốp and Nguyễn Thị Nhung 2006 :
24)。仏植民地官僚、ラブーシエール(Labussiere)
はコーチシナのムスリムに関する報告書の
中で、ジャヴァクルのことをマレー人として記
している(Labussiere 1880)。彼らは長くムスリム
チャムのコミュニティの近隣に居住してきたの
で、ヴェトナム政府によりチャムとして分類さ
れ、彼ら自身も自らをチャムと自称している。
しかし、メコンデルタのチャムとジャヴァクル
の間には、言語的、経済的、社会的な違いがあ
る。

ムダ派の考えが最初に紹介され広まったムバ
ラクは、ジャヴァクルのコミュニティで、バサッ
ク川(またはハウザング川)を渡るためのフェ
リーの船着場があり、川を渡ってチャオドック
の市場で日常必需品を買いに行く人、通学す
る生徒たちでいつもにぎわっていた。ジャヴァ
クルの中にはタグボートを所有する人もいて、
他の地域のチャムと比較すると経済的に裕福な
人々が多く、チャムに高い利子でお金を貸し付
けている者もいた(Dohamide 2004 : 64)。前述
のサイゴンのナンシー地区でコーチシナ・マ
レー協会を設立したダン・マルもジャヴァクル
だった。彼がコーチシナ・マレー協会の設立に
あたり、チャムではなくマレーという民族名を
協会名に入れることにこだわったのは、チャム
よりもマレーのほうが民族名として知名度が高
かったという便宜上の理由の他に、彼がジャ
ヴァクルであったこともその理由であったと考
えられる。ジャヴァクルの人たちには、祖先か
ら受け継いだマレーの血が流れているという自
負がある。

ムスリムチャムの中で、マレーは宗教的に特

別な地位を獲得している。これは、イスラーム
の教えは、マレー語によって解説されているこ
とに起因すると思われる。アラビア語で書かれ
たコーランの意味を解説するのに使われるキ
タツブ(Kitab)は、マレー語で書かれている。
金曜日の礼拝のコタツバ(Khotbah)と呼ばれ
る講話も、マレー語で行われる。マレー語はチャ
ムの宗教的エリートや知識人の言葉である。ラ
ブシエールは同様なマレー語の優位性が、19世
紀のチャムの間で見られることを報告してい
る。マレー語は経済的、宗教的な優位性を示し
ており、裕福なチャムや宗教的な知識人は、彼
らの子弟をマレーシアに留学させたりしていた
(Labussiere 1880)。

仏植民地時代にフランスは、英領マラヤのテ
レンガヌ州(Trengganu)で使われていたサイ
コール・イスラーム(Saykhul-Islam)という役
職を転用した。サイコール・イスラーム、また
はフランス語でシェフ・デ・マレー(Chef des
Malais)と呼ばれた役職は、メコンデルタのム
スリムコミュニティの統率者・代表者というこ
とであった。伝統的にサイコール・イスラーム
は、ジャヴァクルのコミュニティであるムバラ
クから選出されている(Dohamide 2004 : 63)。
フランス植民地政府が去った後もこのサイコ
ール・イスラームという役職は残り、代々ムバ
ラクのジャヴァクルによって担われていた。こ
のようにジャヴァクルは、メコンデルタのムス
リムチャムの中で経済的、社会的、宗教的な影
響力を持つエリート層を占めていたと考えられ
る。

ところが、このジャヴァクルの地位が揺らい
で来る状況が生じる。ムバラクに隣接するチャ
ムのコミュニティ、アズハル(Azhar、またはチャ
オザング)がムスリムチャムの中で注目される
ようになったのである。アズハル出身のウマル
・アリは10年間メッカのアズハル大学に留学
し、故郷に戻るとハケムになり、イスラームの
教義などを教える学校、マドルサ(madrasah)
を開いた。彼の教え子たちの多くが各地で宗教
上のリーダーとなり、アズハルはメコンデルタ

のムスリムチャムの中で、教育の中心地となる。ウマル・アリの名声は高まり、植民地制度の生き残りであったサイコール・イスラーム⁽²³⁾を凌ぐようになる。フランス植民地時代に地位を与えられ、メコンデルタのムスリムチャムの社会を統率するものという自負のあったジャヴァクルには、新興して来たアズハルのチャムの宗教活動が目障りだったのであろう。両者の対立は激しくなり、グエン・ヴァン・ルアンが言うように、ムダ派とトア派の対立と絡み合い複雑化した。ついに問題解決のために1960年に集会が開かれた結果、仏植民地時代の名残りのサイコール・イスラームの制度の代わりに、ハケム委員会 (Hội Đồng Giáo cả) が設立された。ハケムであった、ウマル・アリはこのとき推挙されてムスリムコミュニティの最高指導者、ムフティとなる (Nguyễn Văn Luận 1974: 292-294, Dohamide 2004: 79; Nguyễn Hồng Du'ng 2007: 179)。

ハケム委員会のメンバーはすべてムダ派に対立したトア派の人たちだった (Nguyễn Văn Luận 1974: 293-294)。チャム協会はハケム委員会の人々を宗教アドバイザーにすることによって、結果的にトア派に組することになった。チャム協会の設立メンバーの一人で、ジャヴァクルのムサ・ミスキーは (Mousa Misky) 知識人で教師だったが、ムダ派の教義を研究し実践するようになり、結果的にチャム協会から追放されてしまった (Nguyễn Văn Luận 1974: 281)。

ムダ派の広がり、フランス植民地時代にムスリムコミュニティにおいて特別な地位を与えられていたジャヴァクルによる、ムスリムチャムのコミュニティの新しい社会的、政治的な動きに対抗した動きであったとも考えられる。メコンデルタという地方をベースにした仏植民地時代の政治機構の生き残りは、都市をベースにした世俗的なチャムによるチャム協会によって取って代わられた。カットンボンのチャムを中心としてサイゴンで設立されたチャム協会は、ムスリムチャムを代表する団体となり、サイゴ

ン政府と交渉するようになった。アズハルがチャムの宗教教育の中心になり、アズハルのハケムがムスリムを統率するムフティになり、サイコールイスラームは立場を失った。

ジャヴァクルの間で広まったムダ派の運動は、伝統的な地位を失っていったジャヴァクルの、新興勢力に対抗する一つ的手段であったと考えられる。ムダ派の教義に従った多くの人が、高い教育と教養を持った宗教リーダーであり、影響力を持つ家族の出身であった。マレーシアからもたらされた新しい教義を使うことによって、彼らは伝統的に守られてきたジャヴァクルのメコンデルタにおける特別な影響力を失うことに抵抗したのだ。

チャム協会の持つ意義

ドハミデは、サイゴン政権下において14年間存続したチャム協会について、複数の成果を挙げている。第一の成果は、チャム自らが働きかけて、それまでのチャムの中に伝統的に形成されていた宗教に基づく階級的な組織ではなく、世俗的で民主的な組織を作り運営したということだ。殊に、チャム協会はヴェトナムの少数民族として、彼らの生活を向上させるために、宗教教育とは別に普通教育が重要であることを説くことが出来た。第二の成果は、ヴェトナムで比較的孤立していたムスリムのコミュニティを、世界のムスリム社会と結びつけることが出来たということだ。

現在、少数民族がヴェトナムで置かれている立場を考えると、少数民族自らが働きかけて組織し運営する団体は、事実上、設立不可能である。しかしながら、1975年以前、チャムはその不可能を実現させていたのであった。チャムの民族意識の観点から考えると、チャム協会の設立とその活動は、ムスリムチャムの中で民族意識を覚醒させたということが出来る。

徴兵免除という理由とは別に、チャムという名前を冠した団体を発足させたのには、チャムの青年たちに対して、チャムという民族でいる

ことを恥じず、誇りを持ってほしいというドハミデの願いがこめられていた。チャム協会は同時に新しい規範をチャムのコミュニティの中に形成し、チャムという民族意識をより強く打ち出していこうとしていた。

地理的に離れているためにメコンデルタのチャムと中南部のチャムの間ではあまりコミュニケーションがなく、メコンデルタのチャムの中には自分たちの起源はアンコールにあると考えている人々もいて、良い関係が作られていなかった。したがって、チャム協会が中南部のチャムとメコンデルタのチャムの双方を会員として組織を運営したというのは、稀有なことであった。メコンデルタのチャムと中南部のチャムは、チャム協会を通して交流を深めていくことができた。ドハミデは中南部のチャムのコミュニティを訪ね、メコンデルタのチャムと同様にシリーズとして、雑誌バックコアに記事を書いている。彼の本、「チャム民族の略史」は、主にヒンドゥー教を信奉していたチャンパの歴史を中心にまとめてあり、ムスリムのチャムの間で、彼らの起源はチャンパにあるのだということを広く知らしめた。

メコンデルタのチャムと中南部のチャムの交流を深め、同じ民族としての意識を高めようというドハミデの努力は、彼がアメリカに移住したあとも続いている。2004年に彼は「チャンパの国 (Bangsa Champa)」という本をアメリカで出版した。この本の表紙にはチャムの伝統的な衣装をまとった女性たちが描かれている (写真1)。彼女たちは現在も残るチャンパのヒンドゥー教の遺跡で最も有名なものの一つ、ポ・クロング・ゲライ (Po Klong Garai) の周囲で踊っている。彼がチャンパの遺跡と伝統的な踊りを表紙にしたのは、ムスリムチャムに彼らの起源を忘れてほしくなかったからだという。表紙には、頭に甕を載せた女性の踊り子の一団がポ・クロング・ゲライ寺院から出てきて、表紙の正面に描かれた若い女性に向かってやってくるように描かれている。この正面に描かれた若い女

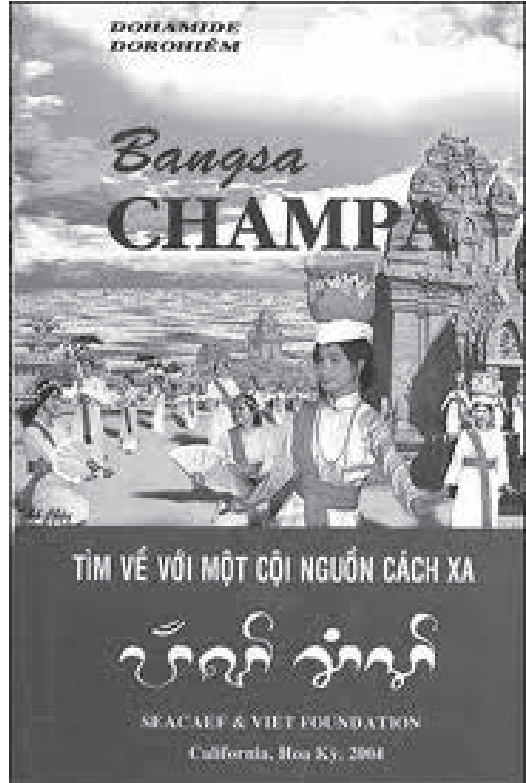


写真1. <https://rashkaputra.wordpress.com/tag/champa/>より転写)

性は、一団の踊り子たちとは異なり、白いスタンドカラーの服に金のネックレスをしている。この若い女性のモデルになったのは、ジャスミン・タム (Jyasmine Tham) というバニ教徒で、後にイスラームに帰依した女性である。この踊り子の一団を率いているかのように描かれている彼女こそが、ドハミデの思い描くチャムの将来像である。彼女は、チャンパ遺跡というチャムの歴史を背景に、チャムの伝統的な踊りを舞い、そして前を、チャムの将来を見つめている。ドハミデはチャムの将来はイスラームにあるという。イスラームによってすべての異なるチャムが一つになれると思っているのではなく、チャムがチャンパの起源を踏まえた上で、未来に向かって進む時、チャム組織の基盤になるのがイスラームであって欲しいと彼は願っている

のだ。

終わりに

ゴー・ディン・ジエム大統領が1963年に暗殺された後、新しい憲法が制定された。新憲法の下で少数民族委員会 (Hội đồng cách sắc tộc) が少数民族発展省の中に設置され、少数民族法の草案作りなどを行った。委員会のメンバーの1/3は政府によって任命され、残りの2/3は少数民族自身が選挙によって選出された。異なる地域から4名のチャムが委員会のメンバーになり、ドハミデも1972年から1975年まで委員として活動した。チャム協会が設立され運営された背景には、当時の南ヴェトナムにおける、少数民族にある程度の自治を認める (認めざるをえない) 政治的な空気があったからだろうと推察される。現在、チャム協会に対する評価は「傀儡政権の道具」という非常に芳しくないものである。それは単にチャム協会が南ヴェトナム政府の高官の働きかけによって設立されたものであること、南ヴェトナム政府公認の団体だったということから来る評価である。こういった評価はどちらかというところ、共産党政権による南ヴェトナム政権否定の一端と考えることが出来る。これらの否定的な評価は、実際にチャム協会の活動を調査した結果出てきたものであるとは言い難い。

チャム協会の設立とその活動は、サイゴンにやって来たメコンデルタのムスリムチャムの民族意識の覚醒の過程と捉えることが出来る。彼らは、チャムという少数民族であることを主張することによって、彼ら民族の特性を自覚し、少数民族としてヴェトナム社会の一員であろうという努力も示した。チャム協会は現在のヴェトナムにおいて、単に、政府による政策の受け手である少数民族の人たちが、彼ら自身をエンパワメントすることへの可能性を示唆するものである。

<注>

- (1) ヴェトナムの民族分類に関して分析した伊藤正子は民族分類が持つ問題点と、それに対して人々がどのように折り合いをつけているかということを説明している (伊藤2008)。
- (2) 1999年のヴェトナム国勢調査による。
- (3) 1999年のヴェトナム国勢調査による。
- (4) 新江利彦は、自らをチャムまたは、アヒール (Ahier) と呼ぶグループは、バラモン教徒ではなく、彼らもまたアッラーを信奉していると説明する。チャム (アヒール) をバラモン教徒とするのは、仏植民地時代にチャムを調査したフランス人研究者の誤解だとしている。実際はチャム (バラモン) もバニもイスラームを信奉しているのであり、バニがアッラーに対する儀式を行うのに対して、チャム (バラモン) はアッラーが信奉される以前の神々に対して儀式を行っているのだとしている (新江 2001 : 243, n8, n9)。私は新江のこの主張を詳細に分析しておらず、本稿では現地のチャムの説明に基づいて一般的なチャム/アヒール/バラモン教徒に対する、バニ/アワル/バニ教徒というカテゴリーを使用した。
- (5) 1999年のヴェトナム国勢調査による。
- (6) ギエム・タムはフランスで教育を受けた人で、ニントゥアン省のチャムの知識人から、礼節を重んじる紳士、チャムの文化を深く理解している学者として尊敬されていた。
- (7) ドハミデとの2010年12月 28日の電子メールによるコミュニケーション。
- (8) サイゴンに最初に建設されたモスクは、サイゴン河沿いにあるマシジット・アル・ラヒーム (Masjid Al Rahim) で、マレー/インドネシア系の人々のモスクとして知られている。このモスクは、ジャヴァ海にあるバワン島 (Bawean) から19世紀ごろに仏領インドシナにやって来たバワン人たちによって建設された。マルタ・ストコッフ (Malte Stokhof) はバワンの人たちがヴェトナムにおいて置かれている複雑な立場について説明している。彼らは「永住権を持つ外国人」

- として分類されており、ヴェトナムの民族分類からは除外されている (Stokhof 2008: 42)。
- (9) ドハミデとの2010年12月25日の電子メールによるコミュニケーション。
- (10) IDE-JETROによれば、1969年のサイゴンにおいて、最高級品質の米が100キロ4,175 ピアストラしている (<http://d-arch.ide.go.jp/browse/html/1969/201/1969201DIA.html>, 2011年11月28日にアクセス)
- (11) 大学生は兵役を猶予してもらうことが出来た。
- (12) 当時、クメール系 (クメール民族), 中華系 (ホア民族) のヴェトナム人は兵役免除の対象にはなっていなかった。
- (13) 正確には兵役延長、モラトリアムであったが、チャムが徴兵されることはなかったので、事実上の兵役免除。
- (14) バークムは、彼らの住んでいたサイゴン郊外の名称。バークムの人たちは後に、サイゴン市内のホアフング地区 (Hòa Hưng) に移住してきて小さなコミュニティを形成した。ヴェトナムイスラーム総会の本部は、このホアフング地区に置かれていた。
- (15) 当時、コーランを教える教師たちへの報酬は人々の善意の寄付金によってまかなわれていた。
- (16) ゴー・ディン・ジエムの政権下、一夫多妻制は非合法であった。
- (17) このチャム協会のどちらかという新しいアプローチは、コーランを正しく暗記し、正しく発音することに重きを置く伝統的な宗教指導者や知識層の反発を受けることになる。
- (18) 現在、ビントゥアン省にイスラームのモスクは建設されていない。しかしながら、ヴァンラム (Vãn Lâm) のハケムの説明によれば、カンホア地区 (Kánh Hoa) のミンミィ村 (Minh Mỹ) では1975年以前から約30家族がイスラームに帰依しているという。1974年ごろにはファンリ (Phan Ri) ムスリムコミュニティのリーダーであるハケムもいたという。最近、ビントゥアン省の40家族が地方政府に対してモスクの建設の許可を申請している。
- (19) 1974年までにアメリカはヴェトナム戦争のヴェトナム化を決定しており、ヴェトナムへの支援を大幅に削減してしまっていた。南ヴェトナム政府高官としてこの国際会議に参加したドハミデは、サウジアラビアのファイサル国王と懇談し、サウジアラビアの資金と、日本の技術を導入して南ベトナムで製薬工場を作る話の交渉を始めた。このプロジェクトによって、101種の薬を作るという計画であったらしい。当時、マレーシアの首相を引退したタンク・アブドラフマンが、世界ムスリム開発銀行の書記長の地位にあり、この計画に協力することになっていた。しかし、この会議の2カ月後にファイサル国王は暗殺され、計画は頓挫した。
- (20) ホーチミン市にあるモスク、のマスジット・ムスルマン (masjid Musulman) のイマームであったヨソーフ氏 (故人) は、ムダ派がチャムの間で最初に知られるようになったのは1955年ごろであったと述べている。
- (21) フィリップ・テイラーがメコンデルタのチャムに関する著書の中でムダ派について言及している。またムサ・ザインは (Musa Zain) カンボジアのチャムにおけるムダ派の活動について調査している (Taylor 2007; Mohamad Zain bin Musa 2008)。
- (22) ムハマド・ザイン・ビン・ムサ (Mohamad Zain bin Mus) はインドシナ半島にムダ派の教えをもたらしたのは、カンボジア出身のチャム、イマーム・ムサ (Imam Musa) 別名リー・ムサ (Ly Mousa) だとしている。彼はバンコックにしばらく滞在した後、タイ南部のパタニでイスラームの教育を受け、その後マレーシアのケランタン州に渡った (Mohamad Zain bin Musa 2008)。
- (23) グエン・ヴァン・ルアンはサイコール・イスラームであったタング・カオ・マツ (Tăng Khạo Mat) が新聞紙上に掲載したハケム・ウマル・アリに対する公開抗議文を著作の中で紹介している。この抗議文の中で、サイコール・イスラームこそがチャムのコミュニティを代表する正式な地位を有するのだということを主張していた

- (Nguyễn Văn Luận 1974 : 291 footnote 1)。
- <引用文献>
- Bedlington, Stanley S.
1978 Malaysia and Singapore : *The Building of New States* Ithaca and London : Cornell University Press.
- Dohamide
Người Chăm ở Nam Bộ <http://namkyluctinh.org/a-vh-vminh/dohamide-nguoicham.htm>, accessed to Nov. 28, 2011
- Dohamide & Dorohiem
2004 *Bangsa Champa: Tim về một cội nguồn cánh xa* California : Southeast Asian culture and Education Foundation & VIET Foundation.
- 樋口英夫
1995 風景のない国・チャンパ王国：遺された末裔を追って 東京：平川出版
- 伊藤正子
2008 民族という政治：ベトナム民族分類の歴史と現在 東京：三元社
- Kamarulnizam Abdullah
2003 *The Politics of Islam in Contemporary Malaysia*. Bangi : Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia
- Khong Dien
2002 Population and Ethno-Demography in Vietnam. Chiang Mai : Silkworm Books.
- Labussiere, A
1880 Rapport sur Les Chams et Les Malais De L'Arrondissement De Chaudoc, Saigon : Imprimerie Du Gouvernement
- Mạc Đu'ờng
1978 “Chủ nghĩa thụ'c dân mó'i và vấn dân tộc it ghu'ò'i ở Nam Việt Nam 1954 - 1975” in Những vấn đề Dân tộc học ở miền nam Việt Nam, Ban Dân tộc Viện Khoa học Xã hội tại Thành phố Hồ Chí Minh.
- Mohamad Zain bin Musa
2008 “Dynamics of Faith : Imam Musa in the Revival of Islamic Teaching in Cambodia” in Omar Farouk & Hiroyuki Yamamoto ed., *Islam at the Margins: The Muslims of Indochina*, CIAS Discussion Paper No. 3. Kyoto : Center For Integrated Area Studies, Kyoto University, pp59-69.
- 桃木至朗
1999 チャンパ：歴史・末裔・建築 東京：めこん
2001 「東南アジアの海と陸：チャンパとチャム族のネットワーク」尾本恵市・濱下武志・村井吉敬・家島彦一編 海のアジア3：海と人のダイナミズム 東京：岩波書店pp61-84.
- Nagata, Judith
1986 The Impact of the Islamic Revival (Dakwah) on the Religious Culture of Malaysia. In *Religion, Values and Development in Southeast Asia*, ed. Bruce Matthews and Judith Nagata, 37-50. Singapore : Institute of Southeast Asian Studies
- 中村理恵
1999 Cham in Vietnam: Dynamics of Ethnicity, Ph. D. dissertation, University of Washington, Seattle, Department of Anthropology.
2001 「チャンパかアンコールか：チャムのエスニシティーと彼らの歴史認識」, ベトナムの社会と文化 第3号 : 221-223
2009 “*Awar-Ahier* : Two Keys to Understanding the Cosmology and Ethnicity of the Cham People (Ninh Thuận Province, Vietnam)” in Hardy, Andrew, M, Cucarzi & P. Zolese ed., *My Son*. Singapore : National University of Singapore Press. pp78-106.
- Nguyễn Hồng Du'ờng (ed.)
2007 Một số vấn đề co' bản về Tôn Giáo Tín Ngu'ờ'ng của Đō'ng Bào Chăm ở Hai tỉnh Bình Thuận Ninh Thuận Hiện Nay Hà Nội' : Nhà Xuất Bản Khoa Học Xã Hội
- Nguyễn Văn Luận
1974 Ngu'ò'i Chăm Hồi-Giáo Miền Tây Nam-Phần Việt-Nam Bộ Văn Hóa Giáo Dục và Thanh Niên Phan Văn Dō'p and Nguyễn Thị Nhung
2006 Cộng Đō'ng ngu'ò'i Chăm Hồi Giáo ở Nam bộ Trong Quan hệ giớ'i và Phát triển. Hà nội : Nhà Xuất bản Nông Nghiệp

- Reid, Anthony
1999 *Charting the Shape of Early Modern Southeast Asia*. Chiang Mai : Silkworm Books
- Roff, William R.
1994 *The Origins of Malay Nationalism* (2nd Edition)
Kuala Lumpur, New York, Oxford, Singapore :
Oxford University Press
- Salemink, Oscar
2003 *The ethnography of vietnam's central Highlanders*.
London and New York : RoutledgeCurzon
- 重枝豊 & Tran Ky Phuong
1995 *チャンパ遺跡：海に向かって立つ* 東京：
連合出版
- 新江利彦
2001 「資料：現代ベトナムの民族政策文書—チャム人同胞に対する工作に関する中央書記局3号通知、訳と解説」ベトナムの社会と文化 第3号：241-291
- Stokhof, Malte
2008 "The Baweans of Ho Chi Minh City" in Omar Farouk & Hiroyuki Yamamoto ed., *Islam at the Margins: The Muslims of Indochina*, CIAS Discussion Paper No. 3. Kyoto : Center For Integrated Area Studies, Kyoto University, pp34-58.
- Taylor, Philip
2007 *Cham Muslims of the Mekong Delta : Place and Mobility in the Cosmopolititan Preriphery*. Honolulu : University of Hawai'i Press.
- Trần Thị Minh Thu
Khat quát về Hồi giáo và Hồi giáo ở Việt Nam
tgcp.gov.vn/Plus.aspx/vi/News/38/0/162/0/954/KHAT_QUAT_VE_HOI_GIAO_VA_HOI_GIAO_O_VIET_NAM, accessed on the 2nd of December, 2011
- 吉本康子
2010 「イスラーム性とエスニック要素をめぐる交渉過程についての一考察：ベトナムにおけるチャム系ムスリムの事例を中心に」, ICIS次世代国際学術フォーラムシリーズ 文化交渉による変容の諸相 pp223-247
- 吉沢南
1982 *ベトナム現代史の中の諸民族* 東京：朝日新聞社
(客員研究員 マレーシア北方大学客員講師)